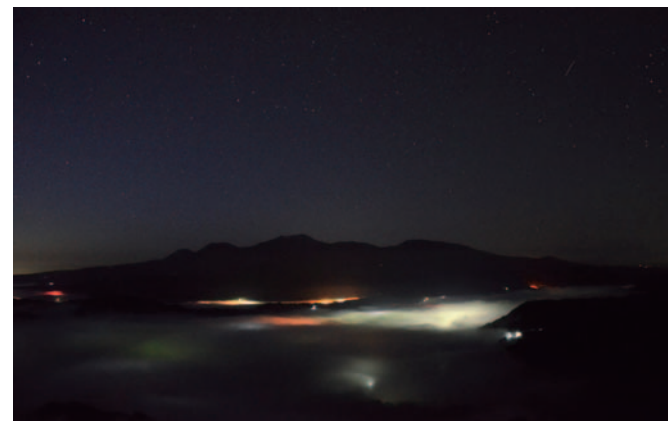




「川内川あらし」撮影者：小野寺貴人さん

## 霧とは

霧は俳句の世界では秋の季語となっているように、秋になりますと特に朝は霧が発生することが多くなります。霧とは、地表付近で無数のごく小さな水滴が空気中に浮かび遠くがはつきり見えなくなる現象で、かつ水平方向の見通しが1 km未満になった時を気象庁では「霧」と定義しています。秋が深まるこの時期、陸地で発生する霧は放射霧といいまして、夜間に晴天で風が弱いときに冷え込む(=放射冷却)ときにできるものがほとんどです。このため霧が発生しやすい場所は、内陸部の盆地といった冷気がたまりやすい場所が多いことが特徴です。そのような場所で発生する霧は、まるでコップやお皿の中にたまったドライアイスの煙のごとく地を這うように広がり、一見するとほとんど動きがないように見られます。



鹿児島県湧水町に広がる霧 ここは雲海が見られることで有名なところ。向こうに見える山々は霧島連山

## 荒々しい霧

一方で、荒々しくダイナミックに霧が移動していく様子が見られる場所もあります。例えば、三重県御浜町では「風伝おろし」といって、入鹿盆地で発生した霧が風伝峠を越えて尾呂志地区に下っていく光景を見ることができます。



「風伝おろし」画像提供：恋しよおろし

これはコップの縁からドライアイスの煙がもくもくと流れ出す様子そのものです。盆地ということで四方が山に囲まれているのですが、山が低いところがいわば霧が流れ出す出口となっており、その出口からこぼれ出た霧が一気に麓へと流れ下ります。その様子は「雲の滝」とも呼ばれるほど動きが速く、遠くから見ますとまさにそこに滝があると見紛う光景です。

また荒々しい霧ということでは、あらしのような強風を伴って流れ出す霧もあります。有名なのは、愛媛県大洲市の「肱川あらし」と鹿児島県薩摩川内市の「川内川あらし」です



「肱川あらし」画像提供：肱川あらし予報会



「川内川あらし」画像提供：川内川あらしプロジェクト

霧が盆地(肱川あらしは大洲盆地、川内川あらしは川内盆地)で発生するという点では「風伝おろし」と同じですが、異なる点は霧が川を下っていくことにあります。肱川あらしは肱川、川内川あらしは川内川という、共に一級河川を霧がゆっくりと流れ下っていくのですが、肱川と川内川は共に河口付近では山がせりだしており川幅が狭くなっています(=狭さく部)。



肱川の河口付近、筆者撮影



川内川の河口付近、筆者撮影  
肱川と川内川の河口付近の地形は似ている

この狭さく部を通過すると、霧は勢いをつけて河口へと流れ出します。これは、ホースの先端をつまむと水が勢いよく飛び出すのと同じことで、河口付近は霧を伴った冷風が強く吹くのです。これが「あらし」と名付けられている所以です。また、この冷たい強風は河口から海では蒸発霧(=けあらし)を発生させ、それは沿岸から数キロにわたって扇状に広がることもあります。これらの光景は見る人を圧倒する迫力があり、かつ珍しい光景であることから観光資源ともなっています。

## 最後に

肱川は今年7月の大雨(平成30年7月豪雨)により氾濫して、愛媛県大洲市は広範囲で浸水被害に見舞われました。この記事を書いている現在でも復興道半ばです。今年を振り返ってみますと日本各地で自然災害が多発しました。ボランティアや寄付といった直接支援が各地でなされましたが、被災地が落ち着いた段階で観光してみることも立派な支援ではないかと筆者は思っています。愛媛県大洲市は伊予の小京都といわれるように、昔ながらの街並みや建物が保存されていて、とても美しいところです。そして「肱川あらし」という珍しい自然現象も起こります。この秋、「肱川あらし」を見学しに愛媛県大洲市を訪問されてみてはいかがでしょうか。参考までに・・・肱川あらしが発生しやすい日は、①移動性高気圧にゆるやかに覆われて晴れる。②明け方から朝が満潮に向かう時間帯である。③前日は日中と夜との気温差が大きい、です。このような条件の日を狙ってみてください。

いまむら さとし  
今村 聡

Profile

NHK鹿児島放送局  
気象キャスター。兵庫県出身。  
広島大学理学部地学科卒業。  
2003年からNHK鹿児島放送局で気象キャスターとしてテレビやラジオに出演中。  
近年は気象現象(霧)を活用した地域おこしの活動を手掛けている。  
趣味はテニス(最近はおっぱら見るだけ)

